

裏

PLUS 探検家風田

PLUS 05

# 寺町通と新京極通、 ずっと昔の物語。

## 寺町通の起源

巻頭特集の裏寺界限、  
対してその表と言えるのが  
修学旅行生や買い物客が行き交う、  
寺町通・新京極通。  
今や当たり前前の風景ではあるが、  
そのルーツ、ずっと昔の物語は…。



寺町通の歴史は平安時代にまで遡る。794年(延暦13年)、桓武天皇が京都に平安京を築き、その都の中央には、南端の(今の九条通あたり)羅城門から大内裏へ至る朱雀大路が南北に走り、その朱雀大路を中心に碁盤の目のように道路が整備される。この時、平安京の最も西側に造られた通が西京極大路、そして最も東に造られた通が東京極大路と名付けられた。この東京極大路がちょうど現在の寺町通の場所にあたる。その後、平安京が誕生してから673年目、1467年(応仁元年)から11年間続いた応仁の乱は、都を舞台に27万人の大軍勢が争い、都を荒廃させてしまう。その際、東京極大路も例に漏れず戦禍に巻き込まれ跡形もなく、その面影を微かに残していたのが、中川という小さな小川と、現在の新京極四条あたりにあった時宗(民衆宗教として発展し、「四条道場踊り」といわれる踊り念仏で有名な)つた宗派の四条道場金蓮寺だったそうだ。驚くことに戦国時代を経て安土桃山時代後期まで、都はそのまま廃れたままであった。そして都の復興とともに東京極大路の復興が始まるのは、豊臣秀吉が政権を掌握してからのこと。

## 今昔くまべ 新京極通



昭和32年7月、新京極通にアーケードが誕生した。写真(上)は恐らく昭和30年代のものと思われる。写真(下)は現在の新京極通。阪本漢方堂はほぼ同じ姿でこの場所にあったようだ

## 荒廃した都からの復興

秀吉の手により、荒れ果てた都を立て直す京都復興の計画が始まり、1590年(天正18年)に「寺町通」が誕生した。その名は市中に散在していた寺院を「カ所にまとめようと、通の東側に移転させて並べたこと」に由来している。またこの時に、お土居(土で作られた垣)で都を囲み、このお土居の内側を洛中、外側を洛外とおおよそ区別するようになったそうだ。寺町通に移転してきた寺院は、ちょうど鴨川の西岸に築かれたお土居に背を

向けるように建ち並び、西側が正面になるよう、つまり寺町通に沿って門を構えたのである。「敵が東側から攻めてきたときのために、都の東側(寺町通沿い)に寺院を集めたんやろな。寺院は援軍の宿舎としても使われてたそうやから」と錦天満宮宮司・大和さんは教えてくれた。寺院の建ち並ぶ通として認知されるようになる、そこで商売を始める者が現れ始める。そして、門前町としての寺町通が徐々に形成されていくこととなる。位牌・櫛・石塔・数珠・仏師…、これら寺院に関わる店々が17世紀末頃には並んでいたそうだ。





御祭神に菅原道真公を祀る通称「錦の天神さん」は、「知恵・学問・高才」「頭の神様」「招福・厄除け・災難除けの神様」としてご利益がある

界隈の歴史に通称している錦天満宮宮司の大和政安さん。今回の取材でも大変お世話になった御仁である



平安時代にすでに創建されていた錦天満宮は、屋敷管原院、後に旧六条河原院に位置したが、秀吉の京都復興計画の際、現在の地に移転させられている。後の明治5年、神仏分離令により、錦天満宮を境内に抱えていた歓喜光寺と分離独立し、歓喜光寺は東山五条を経て山科へ移転していった。また錦天満宮由緒書には「明治五年、新京極通開通の際、社有地を土地削減せられ、益々旧観を異にせり。社有境内地約二百坪、(その内、門前錦小路寺町まで七十坪参道を、京都市に無償貸与中)」と記されている。

### 【錦天満宮】 にしきてんまんぐう

■京都市中京区新京極通  
四條上ル中之町537番地  
☎075-231-5732



## ハイカラな通りへ

明治時代に入ると寺町通の姿がまたガラリと変わり始めた。明治維新後間もない1873年(明治6年)には、文明開化のシンボルの一つである牛肉を扱う「三嶋亭」が寺町三条で創業し、洋菓子店や写真館なども誕生し、「寺の町」から「ハイカラな町」へと変貌を遂げていくこととなる。さらに1895年(明治28年)〜1926年(大正15年)までの31年間に渡り、寺町通には路面電車が走っていた。当初は丸太町通〜二条通間、そして蹴上へまで通じ、その後さらに北の今出川口まで延長するなど、当時の京都の

## 新京極通の起源

メインストリートとして股脈を見せていたのは、河原町通ではなく、この寺町通だった。

一方の新京極通の開通は寺町通の誕生に遅れること282年、1872年(明治5年)になるのだが、その経緯を遡れば隣りの寺町通と深く関わっている。現在の新京極通六角に位置する誓願寺は、かつて三条通〜六角通あたりまでの広大な境内を持ち、参詣者も多く、この参詣者を相手に茶店などが生まれ、寺町通が門前町として栄える中心的存在となっていたそうだ。そしてもう一つ門前町を形

成していく中で一役買っていたのが、四条通〜蛸薬師通あたりに広大な境内を誇っていた先述の四條道場金蓮寺だ。江戸時代にはこの境内に芝居小屋が建てられるなどし、「道場へいこう」と民衆を広く集めていたという。ところが門前町として栄えてきた寺町通をひっくり返す大きな転機が訪れる。

## 明治維新を乗り越えて

1867年(慶応3年)、徳川15代将軍慶喜が大政を奉還し、1869年(明治2年)に明治天皇が東京に遷られると、それまで日本の首都であった京都が一方都市になってしまった。その当時の京

都は商売にもかげりが見え、人の出入りも少なくなつたという。さらに追い打ちをかけるように明治維新後の宗教政策・廃仏毀釈・神仏分離令で、寺院の境内は京都府から土地を命じられることとなった。もちろん寺町通に面する寺院も例外ではなく、この界隈は寂れを見せ始めた。そこで「誓願寺と四條道場金蓮寺の民衆の娯楽を結び、ここに各商店を集め、萎縮している京都の人に新たな娯楽場を与え、京都の各本山に参詣する地方の人々に楽しんでもらえれば京都の繁栄になる」と考えた当時の京都府参事・横村正直は、寺町通の各寺の入口から本堂までの境内を接収し、新たな通りを開通させる計画を立てた。そうして1872年(明治5年)に「新京極通」は誕生した。「かつての東京極大路の東に新しい京極ができたのだから」と、新京極通と名付けられたそう。現在、寺町通と新京極通を繋ぐ小路の先に寺の門が多いのは、境内を接収される以前、寺町通沿いに門を構えていた名残といえるだろう。

## 日本の最先端の新京極通

新京極通は完成したものの、構想にあった見世物屋も飲食店もなり手がなく、当初は閑静な通だったという。そこでなんとか町並を整えようと、現在でいう露天商の元締であった阪東文治郎に京都府が依頼し、ようやく商店街の様相を見せ始めた。そして1882年頃(明治15年頃)になると新京極通は時代の最先端を反映させる街として急成長を遂げていく。「すきやき」や「かしわ」をメニューに据えた料理店ができた。同時に精肉店なども現れていたそう。最先端をいくのは料理店だけでなく、興業界にもこの傾向が現れ出す。1897年(明治30年)には、当時新京極通に存在していた東向日座で福畑勝太郎がフランスから

持ち帰った活動写真(映画)の試写会が行われた。これは1896年(明治29年)の神戸に次いで、日本で最も古い映画実績にあたるそう。また興業界の変化も目まぐるしく、明治30年代に入ると、現在の松竹株式会社創始者となる白井松次郎・大谷竹次郎の双子兄弟が、次々と新京極通の芝居座を買収していき、明治39年には南座までも手中に収めることとなった。大正・昭和の時代へ移り変わるにつれ、新京極は芝居や寄席、そして映画の街として一層その色を濃くしていくのである。

## 時代は移り変わっても

現在、読者の方々の目に映る寺町通・新京極通の姿はどんな姿だろうか。ひとつ、忘れてはならないのは、現在の寺町通・新京極通のバックボーンには寺院があるということだ。寺の町が門前町を拓かせ、寺町通を賑わせた。そしてその犠牲の上に新京極通が貫通し、現在にまで至る。栄枯盛衰を経てきた寺町通・新京極通には「枯」も「衰」もくぐり抜け老舗として根付く店々がある一方で、業態の変化やテナントの入替が頻繁に行われている。それは、商売が長続きしないと見えるかもしれないが、時代のニーズに柔軟に歩調を合わせてきた証ともとれないだろうか。新京極通に土産物屋が増えたのも、寺町通にセレクトショップが増えたのも時代のニーズに沿ったものではないか。老舗ばかりが軒を連ねれば商店街は老けていく。絶えず業態の新陳代謝が行われることでこの通りは新鮮な空気を流してきたのではない。そこには、アーケードを取替えたり、テーマソングを作ったり、様々な手法を探ってきた商店街全体の尽力も、もちろんあつたことだ。





# ひよいよと曲がって 第二京極、裏寺へ。

明治時代になると、  
新京極から裏寺町通を  
結ぶ通りが誕生した。

もう一つの京極、第二京極だ。  
映画館・食堂・公園・古着屋、  
現在の姿とは少し違う  
あの頃の裏寺界隈は…。

## 第二京極

錦天満宮を少し下がった辺り。裏寺町通へ抜ける東西の道「第二京極」は、この辺りの土地を所有していた人たちが土地を提供し、1911年(明治44年)に開通した。現在、八千代館や新京極公園・丸二食堂・京極東宝などがある通である。開通した当時は、南側に現在と同じく八千代館、北側に〇〇園食堂(まるまるえんしよくどう/現・丸二食堂)、その東側に盆栽やあつものを扱った加藤菊花園があり、程なく芝居小屋や映画館として営業した三友劇場・大正座(現・京極東宝)ができ、これらの間を埋めるように商店が軒を連ねたそうである。

宮裏にかけて、盆栽陳列所を設けていたが、その場所もいつしか中央映画劇場になり、1932年頃(昭和7年頃)にはいりゆる邦画の二番館に、さらに宝塚キネマの封切館に性格を変え、終戦開戦の1944年(昭和19年)、劇場統制により取り壊されてしまう。後に中央館と呼ばれた同館の東隣りにあった梓屋食堂や日米写真館などは疎開し、現在の新京極公園の原型がこのとき誕生したようだ。

三友劇場と大正座は、現在の京極東宝がある位置に並んでいた。創立ははつきりしないが、三友劇場は1927年頃(昭和2年頃)に松竹映画館となり、1948年頃(昭和23年頃)改築とともに京極大映となった。大映時代にはストリップなどもしていたらしい。一方の大正座は、東京帝劇に対抗し、松竹が大阪に女優養成所を作ったのだが、その修行場であったそう。誕生以来4年ほど経った、1924年頃(大正13年頃)には新富座と改称し、双方ともそれぞれ独立した劇場として機能してきたが、1954年(昭和29年)に京極大映・新富座を合併して改築した、現在に続く京極東宝映画劇場が誕生した。美松もこの頃にはすでにあったと聞く。

この辺りに最も古くからあったといわれるのが八千代館で、いつ出来たのかわかりきりしない。第二京極の開通した明治44年以前かそれ以降か、現在は成人映画館のイメージが強いが、元々は芝居小屋としてその幕を開けたそう。1927年(昭和2年)に火災により一度消失し、建て直した後、一時期は松日劇場と名を変えていたという。八千代館の名に戻すのは1949年(昭和24年)からである。

現在の丸二食堂のご主人・松永茂さんの祖父が〇〇園食堂の創業者であり、第二京極開通の際、土地を提供したうちの1人だった。第二次世界大戦後の食料難の際は、配給だけでは商売をやっていたけれど、「自由に食糧を手に入れられるから」と中国人の名を借り「美華菜館」という店名で営業していたこともあるそう。そうして戦後間もない頃から寿司や雑炊をだしていたというのだから、さぞかし重宝されたことだろう。松永茂さんは「新京極公園は戦後ヤミ市が開かれた場所、そらたいそう賑わってましたよ」と当時を振り返ってくれた。



# 裏寺町通と柳小路通

裏寺町通は、豊臣秀吉が寺町通を作らせた1590年(天正18年)と同じ頃に誕生しているそうだ。その一本西にある60mほどの露地があり、これが巻頭特集でも紹介した「柳小路通」である。いつ頃かは定かではないが、柳小路通は昔「柳の本小路」と呼ばれていたそうで、実際に八兵衛明神が祀られているあたり

に柳の木が立っていたらしい。1872年(明治5年)に新京極通が誕生し、界限が飲楽街として拡大していく過程で、第二京極や柳小路、次項でも紹介する花遊小路が形成されてくる。そして第二京極通が開通してから三友劇場・新富座・中央館などの劇場や芝居小屋の大衆娯楽が栄えたこの辺りの飲食店街として、柳小路は歴史を刻んでいくこととなる。

大正年間からずっと営業を続ける「静」や、戦前には京都大学の学生などで賑わったという名物酒場「正宗ホール」があり、「正宗ホール」は戦時中に酒が手に

入らなくなり店をたたんだが、戦後の最盛期である昭和の中頃には約30軒の店がこの60mほどの通りで営業していたそうだ。「今の若い子が喫茶店やらくいよつに、昔は小金もって柳小路によく飲みに行っていたんや。おでん屋が多かったなあ」と錦天満宮司・大和さん。

現在では数店残るのみだが、巻頭特集で紹介したとおり、界限の復興を願って「御二九と八さいはちべー」の岡本圭司さんは八兵衛明神を改装し、「静」の加藤石根さんから柳小路の店主も路面の舗装に協力するなど、賑わいを取り戻しつつあるようだ。



# KBS京都 × 京都 CF メディアMIX コラボレート企画

# 谷口キヨコ 夜口

KBS京都 毎週土曜日  
夜11時30分 絶賛放映中

谷口キヨコ

こんばんニャー! 谷口キヨコです!  
やっと苦手な冬が終わってあつたかい季節がやってきた! そして共にやってきた卒業シーズン。友達や先輩、後輩とのお別れは寂しいよねえ! あたしも思い出すなあ〜。甘酸っぱい青春の思い出…。卒業旅行とか飲み会もいいけど、土曜の夜は谷口な夜を忘れず見るように! みんなでタニヨルを見て思い出を作ろう!



金太郎

しっかり番組宣伝ありがとうございます、谷口。あ、みなさんどうも。谷口の師匠をやっている金太郎です。最近師匠大好きというメールをもらって大満足の30代です。番組ではメールを募集してるんで金太郎ファンのそこのアナタ、恥ずかしがらずにオレに夏の告白を!

## 京都市の可レセンバラエティー こんなん放送してます!

### 町家で賢い時間を

町家の活用方法は種々だが、ここF区では美容室として活用している。70坪もの大きな町家の中に入って賢くは、たったの3面しか壁がないこと。これは「お客様に賢い時間を過ごしてもらえよう」というオーナーさんのこだわり。ここでは待ち時間が楽しみひとつ?



### 美の写真館

北山にある写真館は女性カメラマンが楽しく写真を撮ってくれるお店。今回は特別にデジタルカメラで美しく撮影できる方法を教えてもらった。とっておきテクニックは白い紙でモデルの顔に光を当て、離れて遠慮で撮影すること。そして、モデルはあごを引ききよとだけ体を横に向けると、これであなたもプロのカメラマン!



### 時代衣裳おかしら

伏見にある時代衣裳おかしらは元々は映画撮影のヘアメイク・着付けスタッフの養成所だったが、豊富な衣裳が揃う「写真スタジオ」。メイクも着付けも手際よくこなしてくれるおかしらのキャラクターに惹かれて通うお客さんもいるとか、あなたもここでスターになりませんか?



番組では谷口キヨコの専用携帯を開設! ご意見、ご感想、応援メッセージなど、どんどんメールしてください!  
メールアドレスは・・・tani-yoru@docomo.ne.jp

## 六兵衛、七兵衛、八兵衛さん。

明治維新後の廃物希釈により、裏寺町界限は寂れ、タヌキが棲むぐらい荒廃していたそうだ。そして新京極通が整備され、明治末期から大正年間にかけてこのあたりも街区整備されるようになった。その時に死んでいたタヌキを祀り、このあたりの地を清めるために、鎮守社として六、七、八兵衛明神の三社が創建されたそうだ。創建された当時、八兵衛明神は現在と同じ柳小路にあり、六・七兵衛明神は現在の新京極公園の公衆便所の北側あたりにあったらしい。そして現在、六兵衛明神は「京極東宝」の事務所に、七兵衛明神は「丸二食堂の店内」に今も大切に祀られている。



六兵衛明神は、京極東宝の地下にある事務所に



七兵衛明神は、丸二食堂の店内に

数年前放棄され、手つかずのまま荒れていた柳小路の八兵衛明神は、昨年12月に改装された



新京極公園には昭和19年まで中央館があった。「馬車」に柱を引っ張らせて壊したんをよう覚えてますわ」と丸二食堂の主人。第二次世界大戦の終戦後はヤミ市と化し、揚げパン・カレーライス、一銭洋食などの食物から果ては平らからった航空燃料などありとあらゆるものが売られていたという

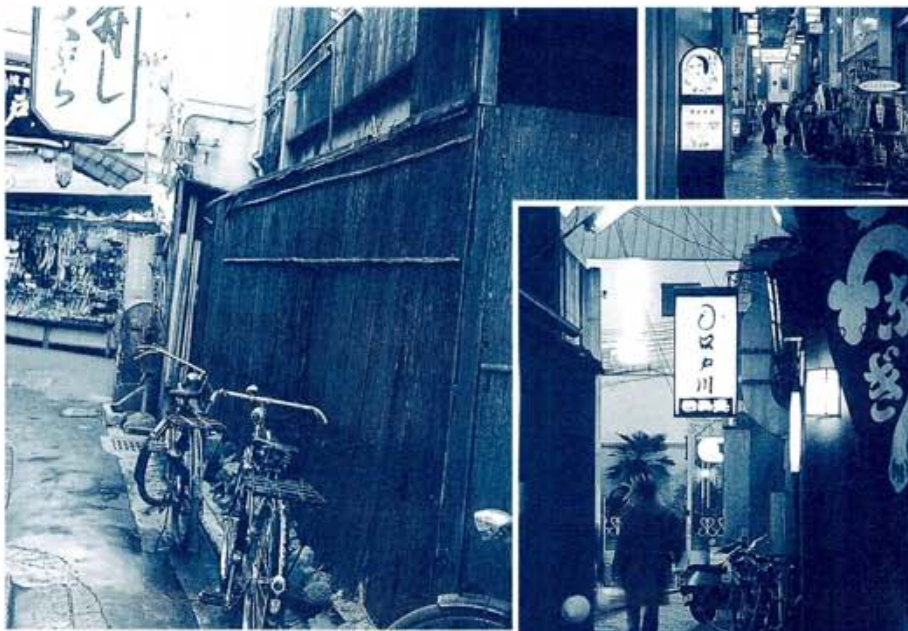


「近頃若いお客さんが増えてきましたねえ、ありがたいことですわ」と丸二食堂の松永茂さん



阿久悠原作の映画「瀬戸内少年野球団 ムーンライトセレナーデ」のロケで使用された八千代館の看板「カサプランカ」は今も変わらず残されている





# 四条通りを一筋上ル、 花遊小路。

昭和の中頃までは、花が遊んだこの通り。  
栄枯盛衰、時代は流れ…。

## 花遊小路

新京極通を四条から上がって一筋目、東に延びる通りが「花遊小路」だ。平日でも賑やかな新京極通に比べれば、その佇まいは少々寂しく映るかもしれない。

花遊小路が誕生したのは1912年（大正元年）。先述にもあったが、かつてこの辺りには広大な寺域を誇った四条道場金蓮寺があった。その境内の一角にあった梅林庵の跡に、明治時代に花遊軒という大きな精進料理屋が商いをしていた。そして現在の花遊小路の礎となる商店街は、この花遊軒あたりを再開発する形で誕生したそうである。ところが花遊小路が開通した当時は店舗は並んでいないもの、通行人は少なく、すぐに閉店する店が多かった。先行き暗い始まりではあったが、1918年頃（大正7年頃）から景気も良くなり、賑わいが訪れ始めたそうだ。

この通りが最も隆盛を見せていたのは、昭和初期の中頃だったそうだ。その頃、花遊小路には、当時の和装の最先端をいく品々を扱う商人の店が多かった。新京極などで活躍する役者や女優、そして祇園にほど近いので、舞妓や芸妓も得意さんだった。旦那衆が彼女らを連れ花遊小路で買い物をして、どんづきの「江

戸川」でこつこつおを食える…。そんな風に花遊小路で休日を通す姿がよく見られたらしい。

そして現在、空きテナントが目立つ、シャッターに閉ざされた寂しい様相を見せてはいるが、古くから商う店々はなおも健在である。花遊小路商店街共同組合の理事長を務める「三文字屋」の浅井正廣さんは「この辺りの店は、長いことじつくり付き合ってきたお得意さんがいる。お客さんを大事にしてきた店が今も残ってるんやね」と語る。またその一方

で「昔から続いてきた商売を、昔のままに続けてはる。『今』が見逃されていく」という危機感も感じているという。

「このままじゃイヤカン」。その気概はまず1993年（平成5年）、任意団体であった商店街を法人化、「共同組合」とし、さらに2年後にはアーケードや路面の改装へとこぎつけた。一度失った賑わいを取り戻すことは、そう容易いことではないが、寺町通・新京極通が栄枯盛衰を乗り越えてきたように、その遺伝子は受け継がれているはずである。

## よーじや



よーじやの名が全国に知れ渡るようになった看板商品の「あぶらとり紙」。1920年頃に発売された当時の大きさは現在の約4倍もあり、顔が覆えるほどだったそうだ

意外に知られていないのが、「よーじや」の本店がこの花遊小路にあるということ。1904年（明治37年）に六角御幸町あたりに店を構え、当初の屋号は「國枝商店」であった。その後、花遊小路に移転し本店を構えた最初の場所は、現在よーじやの事務室として使われている